

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520260

研究課題名(和文) グローバル化時代における文化の混淆の行方—文学、
芸術の変容研究課題名(英文) Cultural Hybridity in a Globalizing Society:
A Case Study of Australian Literature and Art

研究代表者

有満 保江 (ARIMITSU YASUE)

同志社大学・言語文化教育研究センター・教授

研究者番号：20097075

研究成果の概要(和文)：3年間にわたって、グローバル化時代における文学と芸術の変容について、特に多文化主義を標榜するオーストラリアに焦点を当て行った。人種、国家、文化の壁が取り払われることによって国家という枠組みで捉えられる文学が消滅しつつある。その結果、近代的主体が変容し、それに伴い文学の概念が変わっていることを明らかにした。こうした現象が顕著にみられる文学の動向を、現代オーストラリアを映す現代短編集を出版した。国内でシンポジウムを主催、国外の学会へ出席し、その成果として、日本、ドイツ、アメリカで論文が出版された。

研究成果の概要(英文)：I have conducted researches into the transformation in literature and art for three years, particularly focusing on Australian literature and art. Australia is a country which has been advocating “multiculturalism” since the 1970s, and racial, cultural and language changes have been observed and the concept of literature has been changing since individual identity can no longer be said to be based narrowly on belonging to a nation or culture, or on using a certain language. I have obtained good results from my research: I have published an anthology of Australian contemporary short stories in Japanese translation; I have organized some international symposia in Tokyo and Kyoto; I have participated in some international conferences in Australia and Austria; and I have published several papers in book form in Japan, Germany as well as the United States.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：英語圏文学、オーストラリア文学

科研費の分科・細目：文学 英米・英語圏文学

キーワード：グローバリゼーション、文化的混淆、アイデンティティの変容、文学の変容、日豪比較

1. 研究開始当初の背景

(1) 社会を標榜するオーストラリアの現代短編集の翻訳を完了し、翻訳の出版を

現していた。取り上げた作家はアングロ・ケルティック系作家をはじめとする多文化的な背景をもつ作家など、現代オーストラリア

を反映する作家を独自の視点で選び、出版を実現していた。なかには、まだ無名だった作家も含まれていたが、その後、本国で主要な短編集に収録されるなど、当短編集の着眼点の正当性が後に証明された。この短編集を出版するまでに費した年数は、8年にわたる。

(2) 翻訳書の出版に際し、オーストラリアから作家や学者を招聘、国際シンポジウムを開催した。パネリストには、オーストラリアのインド系作家スニル・バダミ氏をはじめ、共同編集者であるメルボルン大学教授ケイト・ダリアン・スミス氏、アボリジニの研究者でオーストラリア国立大学教授のアン・マクグラス氏、東京大学客員教授のディヴィッド・カーター氏を招聘、日本側からは翻訳者のひとり参加し、筆者が司会を務めた。ここでは、マイノリティとしての移民作家の視点、またもうひとつのマイノリティである先住民の視点が作品にどのように反映されているかについて議論され、日本との比較も行われた。シンポジウムと同時に、時を同じくして開催されていた先住民画家、エミリー・ウングワレーの作品展も開催されており、現代における先住民画家の作品をめぐるセミナーも開催、多文化社会における文学、芸術の実情を知り、その関係性について議論した。グローバル化時代におけるアイデンティティの在り方について、文学および芸術に関しての共通点について考察するよい機会となった。

2. 研究の目的

(1) グローバル化する現代において、国家、人種、言語、文化のボーダーが消滅し、その結果、国家や特定の文化や言語、人種を基盤として発展してきた文学が、どのように変化してきているかについて解明していくことが、当研究の第一の目的である。

オーストラリアは1970年代半ば以降、人種、国籍、言語、文化、宗教を問わず、世界中から移民を受け入れている。英語圏以外の地域からの移民は、やがて英語を習得し文学作品を書くようになる。その場合、祖国と現在住んでいるオーストラリアとの関係が、作品のなかにどのように描かれるかについて、大きな関心をもっている。複数の文化や言語、エスニシティに関わる者にとって、アイデンティティはいかに表象されるか、文化、言語、エスニシティの境界は消滅するのか、もしも消滅するとすれば、アイデンティティそのものを定義することが困難となってくるのではないだろうか。当研究の目的は、オーストラリアをケース・スタディとするが、グローバル化の進行する現代において世界中に存在するディアスポラ作家にあてはめることも可能である。国境を越え、言語の壁を超え、

エスニシティの境界を超える人びとのアイデンティティの行方について追っていく。

(2) 第二の目的としては、国家に属する主体の変容が、文学の概念にどのような影響を与えるかを解明することである。近代文学の発展は、国家と深く結びついている。文化やエスニシティの混在によって国家統一を図るためには、一国家に一言語、一文化、一エスニシティという基盤を築く必要があり、アイデンティティはその国家に属することによって確立されたと考えられる。そうすることで国家単位の文学が生まれたといっても過言ではないだろう。日本の近代文学も、このようなパラダイムのなかで発展し、日本文学の系譜が生まれたと考えられる。イギリス文学、フランス文学、ドイツ文学、ロシア文学、アメリカ文学もしかりである。しかし、戦後、人間の移動が盛んになり、さらには21世紀になるとさまざまなグローバル化の進行により、国家の境界線、エスニシティの境界線、文化の境界線は崩壊することになる。国家に属する文学はもはや存在が困難となってくる。多文化社会を国策とするオーストラリアにおけるナショナル文学の在り方は、近代文学の変容を最も顕著に表わす地域となっていると考えられる。グローバル化時代における文学はどのような定義のもとに成り立つのか、あるいはもはや成り立ち得ないものなのか、当研究において解明する。

3. 研究の方法

(1) 1970年代以降に多文化主義によって移民が増加しているオーストラリアの文学に焦点を当て、文化的混淆の背景をもつ作家の作品を分析、作品の主体がどのように表象されているか、作家のアイデンティティが作品にどのような影響を及ぼしているかを分析する。

多文化主義政策が導入された初期のオーストラリア文学は、ポストコロニアル理論が盛んに取り入れられた時期にあたる。この頃の文学には、マイノリティといわれる移民作家、先住民作家たちが英語で作品を書き始めていた。当研究はこの頃のマイノリティ作家の作品とその評価を、アングロ・ケルティック系作家の作品と比較し、マイノリティ作家の作品が高く評価される傾向のある社会的構造について分析する。そして、文学の評価と政治的正当性との関係、また社会構造と文学の相関関係について、ことに移民作家や先住民作家などの具体的な事例をあげて調査する。多文化社会であるからこそ出てくる主流派、反主流派という社会的構造から生まれるさまざまな文学における問題点をとりあげ、そのなかから浮かびあがる文学の評価、文学にみられる政治性について考察を試み

る。取り上げる作家は、ユダヤ系作家、リリー・ブレット、中国系作家、ウーヤン・ユーなどいわゆる移民第一世代、および英語で作品を書き始めた先住民作家、サリー・モーガンなどである。

(2) オーストラリアにおいては移民作家を調査の対象とするが、同時代の英語圏社会においては離国者作家（ディアスポラ）の作品もまた取りあげることによって、こうした作家の主体と故国との関係を分析する。たとえば、かつて英国の植民地だった故国をすでに去っている者にとって、現在居住する場所と故国の存在が、作家の主体性にどのように影響を与えるかについて、また、第一言語と第二言語の区別のある作家にとって、アイデンティティの表象に言語がどのような影響を与えるかについても探求する。もしも、国家が作家の主体の在り方に大きな影響を与えるとすれば、自国を去ったものにとって、本国と現在の国家に属する者にとっての自己（セルフ）が複数に分裂することになる。その場合の自己とは、従来の1国家に属し、揺らぎのない自己とどのように異なるのか、オーストラリアの作家の中では、複数の文化的背景をもつエヴァ・サリス（パレスチナ／ドイツ系）、ブライアン・カストロ（ポルトガル系／イギリス系／中国系）、あるいはキム・スコット（先住民／アングロ・ケルティック系）などを研究対象としてあげる。彼らについて共通していえることは、「故国喪失者」であるばかりでなく、多民族の血が、時として西洋と東洋という二つの文化圏にまたがった民族の血が流れていることである。彼らが生み出す作品は、(1)で示した移民の第一世代や先住民作家たちとは異なる、より複雑な「ディアスポラ」としての特質をそなえている。さらには、オーストラリア以外の作家、たとえばカズオ・イシグロ、サルマン・ラッシュディ、V. S. ナイポールと比較検討してみる。

4. 研究成果

(1)当初、多文化を反映する現代オーストラリア短編小説集を出版し、日本における英語圏の文学の拡大につながる。この翻訳がきっかけとなり、2011年には新たな翻訳プロジェクトが立ち上がる。この翻訳プロジェクトは、オーストラリアを代表する小説を日本に紹介するというものである。彼らの作品を日本に紹介することにおいては、さまざまな意味があると考えられる。

現在、日本の多くの作家の作品が外国語に翻訳されて紹介されている。吉本ばなな、村上春樹、村上龍などが挙げられよう。その場合、海外の読者は日本人作家の作品をどのように読むのか、興味深い。以前の日本文学は、

海外の読者にとって日本文化を知るためのすぐれた手段となりえた。しかし、現在では、たとえば村上春樹を読むとき、日本文化を知るためであるとは考えにくい。現在においては、人びとが海外の作家を読む場合、自国の作家の作品と同じように、同時代を生きる人間の作品として読むということではないだろうか。つまり、現代の作家にはもはや国境、文化やエスニシティの境界は存在しないということになる。もしもあるとすれば言語の境界ということになるであろう。

もしそうであるならば、オーストラリアの作家が書く作品には、現代人が共有するテーマがあると考えられよう。たとえ舞台が異なっても、グローバル化される社会に生きる人間が共有するものを、オーストラリア文学のなかから読みとることは、とても重要なことではないかと考えられる。

移民作家の第一世代は自国を離れて新しい土地に移民として住み始めた経験を作品に反映することから始まる。その場合は家族の歴史や経験が綴られることが多く、また先住民作家については、ライフ・ストーリーが主流を占めた時期がある。彼らの作品は、従来のアングロ・ケルティック系オーストラリア文学にはみられなかった新しい物語をオーストラリア文学に加えることとなる。つまり、オーストラリア文学に、アングロ・ケルティック以外の移民の視点、先住民の視点などが加えられることになる。

ここで取り上げたのはユダヤ系作家、リリー・ブレットや中国系作家、ウーヤン・ユー、そしてサリー・モーガンであるが、彼らの作品から読みとれるのは、彼らが生きた時代の戦争体験や移民としてのオーストラリアでの生活、またその疎外感であり、また、マイノリティに対する迫害などの歴史的事実である。彼らの作品は、しばしば政治、社会、歴史などが密接に関係し、テリー・イーグルトンのいう文学が社会や政治と切り離されている、という定義とはかけ離れたものになっている、ということがいえよう。

(2)しかし、ディアスポラ作家の作品はさらに複雑になってくる。「ディアスポラ」とはもともとギリシア語の「離散」を意味する言葉で、バビロン捕囚以後のユダヤ人のパレスチナ離散、あるいはパレスチナ以外の地に離散したユダヤ人を指すが、その後「国外離散」あるいは「国外」移住の意味としてもつかわれる。つまり、「ディアスポラ」は現在「移民」である人びとを指すのみならず、移民の経験のない次世代の人びとも「ディアスポラ」であるという定義も成り立つ。つまり、ひとつの国に居住しながら、まったく異なる時間と空間になお繋がりをもつ人びとのことを指すことになる。

そうなる、アングロ・ケルティック系オーストラリア人はイギリスからの移民であり、常に故国とのかかわりをもっていると考えられ、彼らもまた「ディアスポラ」ということになるであろう。

「ディアスポラ」作家として取り上げるのは、まずノーベル賞作家であるパトリック・ホワイトである。彼はオーストラリア文学の存在を世界に示した作家として知られるが、彼の作品には「ディアスポラ」の特質がみられる。オーストラリアとヨーロッパ、そしてアメリカを放浪する登場人物はまさに「ディアスポラ」のそれであり、主人公は故郷を棄て世界を浮遊し、アメリカの地で「多面的な自己」を受け入れることになる。しかし、その代償として「個」のアイデンティティを喪失し、最後には「理性」を失い「精神病院」へたどり着く。

この結末は「ディアスポラ」にとっての安住の地が現実の場所に存在するのではなく、自己の内面にあることを意味している。「ディアスポラ」は「記憶」のなかにある「故郷」を追い求め、自身の「意識下」、「無意識」の領域を浮遊する。ホワイトは多文化社会以前のオーストラリア作家であるが、その後のオーストラリアの運命を予言するかのような作品となっている。

多文化社会となって以後の「ディアスポラ」作家として取り上げたエヴァ・サリスの作品も、登場人物はアラブ系移民でキリスト教とイスラム教との狭間で苦悩する。女性主人公は親子、夫婦という人間関係のなかにも「安住の場所」を得ることができない。彼女はホワイトの場合のように砂漠地帯を放浪するが、最後に認識するのは自分が「誰でもない」という現実だった。彼女に安らぎを与えてくれるのは、現実の場所としての故郷ではなく、主人公自身の「内面」、「意識下」にあることが示されている。

東洋と西洋の文化圏を自己の内部に合わせもつブライアン・カストロは、中心をもたない、つまり固定された価値観に支配されることのない主人公を登場させる。主人公にとっての安らぎの場所は、常に「境界線」の向こう側、つまり「どこにもない場所」にある。この、どこの場所にも属さない状況こそが、彼に新しいものを生み出す力を与えてくれ、また真実の意味を与えてくれるという。こうした人物は、伝統的な家族の形態や人間関係が破壊された状況、あるいは歴史の連続性が断たれた状況に置かれている。作家、カストロにとって多文化社会で書くということは、既存の「枠」「境界線」という制約から解放され、自由に新しいものを創り出していくことを意味していると考えられる。

ディアスポラの最後の例としては、先住民作家、キム・スコットを挙げた。彼の作品に

は先にあげたサリー・モーガンのライフ・ストーリーという枠を超えて、先住民と白人の複雑にからみあう人間関係が描かれている。この作品では、従来の先住民作家の作品のように白人の先住民に対する迫害の歴史をオーストラリア史に加えることを目的としてはいない。この作品では、先住民の問題は現代人の親子関係、夫婦関係の問題にすり替えられる。この作品から見えてくることは、先住民対白人というポストコロニアル的な二項対立の構図が消滅し、先住民にとって白人はすでに他者ではなくなっているということである。それゆえ、作品の文脈から作家自身のエスニシティはすでに特定することができなくなっている。

「ディアスポラ」たちが書く「物語」は、「普遍」で「固定的」なアイデンティティや、すでに存在する「物語」や「歴史」を破壊しようとしている。ここに、近代小説の役割の消滅がみてとれるのである。

では、なぜ作家は作品を書き続けるのだろうか。「ディアスポラ」作家のひとりであるサルマン・ラッシュディは、インドで生まれ育ち、現在はイギリスで作家活動をしているが、自分にとっての故郷インドはすでに失われたものであり、取り戻すことができないものだという。そうであるからこそ、作家は小説を書くのだと語っている。

ここにあげたディアスポラ作家たちもラッシュディのように、失ってしまった故郷を取り戻すために、現実には存在しない、意識下にある安住の地である「故郷」を、書くという行為によって取り戻そうとしているのではないだろうか。

なお、上記の(1)と(2)についての研究成果は、次の<1>および<2>の書籍に収録されている。<1>有満保江「グローバル化社会における文学の変容—多文化社会オーストラリアと小説の役割」『イギリス小説の愉しみ』音羽書房鶴見書店、2009年、451頁(420-442)

<2> Yasue Arimitsu, “The Transformation of Literature in a Globalizing Society” in *A Globalizing Society* in *Slavery, and Literature*, Wolfgang Zach and Ulrich Pallua (eds.)

(3) 近代以降の文学にみられる国民国家に支えられたアイデンティティの概念が、グローバル化される現代社会において変容している。ことに、1970年代以降のポストコロニアル文学の焦点となるマイノリティの文学が、グローバル化によって新たな段階に入り、主流、反主流という構造が崩壊し、他者の存在が消滅するなかで、主体が揺らいでいる。主体が浮遊するなかで小説の位置がどのように展開していくのか、新たな課題について研

究を進めた。

1990年代から2000年代は、世界的にみても英語で書かれた文学にはエスニック作家が数多く出現し、彼らはしばしばポストコロニアル作家と呼ばれ、ポストコロニアル文学として扱われることが多くなった。出版社は彼らの作品を積極的に出版し、商業的にも成功した例が多い。そうした風潮があるなかで出現したのが、ベトナム系オーストラリア人作家、ナム・リーだった。アメリカで作家修業をしていたナム・リーの『ポート』という作品集に出版社が注目しない理由はどこにもなかった。アジア系でしかもベトナムを思い起こさせる彼の名前には強いインパクトがあったのである。

しかし『ポート』が大成功をおさめた理由は、必ずしも一般にいわれるエスニック系作家の作品であるがゆえではなかった。なぜならば、この短編集に収められている7つの物語のほとんどが、作家のエスニシティを反映するものではなかったからである。全作品のうちの最初の作品と最後の作品の2編だけがベトナムにかかわる物語であり、それ以外は彼自身のエスニシティとはまったく関係のない時代や場所を扱ったものだったのである。また登場人物についても、そのほとんどが、ベトナムとは異なるエスニシティをもつ人物が描かれている。エスニックな作家が、自分のエスニシティとは関係のない作品を書いているという意外性も、この短編集が多くの批評家や読者の関心をひいたことの大きな要因だったのである。

彼は多様な文化、民族、国家やジェンダーの境界を自由自在に超え、世界のさまざまな場所や人びとを作品に描いている。短編集は読者を、コロンビア、ヒロシマ、ニューヨーク、テヘラン、オーストラリアの漁師町など、世界中のさまざまな場所へ自在に運んでいき、個々の作品は、それぞれローカルな設定ではあるものの、時間的にも空間的にもグローバルな広がりをもったものになっている。リーが作品集に描きだしているものは、架空の時間と空間に描かれた完全なるフィクションである。

ポストコロニアル理論では、「他者」を語る場合「自己」の視点から描くのが当然であった。ポストコロニアル作家は、コロニアル時代の「支配」対「被支配」という力関係から解放され、その力関係の差異を是正するとき、「自己」あるいは「主体」が必要だったのである。「他者」からの「自己確立」はすなわち、「主体性」あるいは「自己」の文化的、民族的「アイデンティティ」をもつことだったのである。

しかし、社会がグローバル化されるにしたがい、多民族、文化的アイデンティティが交錯するようになる。たとえば移民が世代を重

ねると、異なる民族同士の結婚によって民族や文化の境界線があいまいになり、さらに消滅することさえある。生物学的なエスニシティの混淆にとどまらず、ナム・リーの場合のようにひとりの人間が、出自としてのアイデンティティと、国家的なアイデンティティのあいだの、文化的混淆も生じてくる。その結果、移民のもつアイデンティティはもはや明確な境界で区別されるものではなくなり、「自己」と「他者」という対立した構図も崩壊する。そして彼はまったく新しい方法で作品を書くことに興味をもったのである。彼は、短編集『ポート』のなかで、最初の作品と最後の作品のみに、彼のエスニシティにかかわるものとし、それ以外はすべて、文化や民族、国家の壁を乗り越えて作品を書いている。これらの作品を書いているときのナム・リーは無国籍である。作家ナム・リーにとって、「自己」と「他者」の対立は消滅しているといえよう。

近代以降のヨーロッパの小説のように、自己のアイデンティティを追究するために小説を書くのではなく、グローバル化の進む現代において、多様な国や民族、文化に属する人物を描いている。しかも多様な人びとを描くとき、彼は彼らを「自己の視点」で描くのではなく、「彼らの視点」で描き、その存在にいかにリアリティをもたせるかに興味をもつ。すなわちナム・リーは、従来の小説の手法にはなかった、「他者」を「他者の視点から」描くことを、この短編集で試みているように思われる。

ナム・リーの挑戦は、「他者の目」で「他者」を描いたものに、どのくらい「リアリティ」をもたせることができるか、ということであろう。作品のリアリティとは、作品が読者をその物語のなかにどれだけ引き込んで、物語をどれだけ信じさせることができるか、あるいは感動させることができるか、ということである。作家は作品を書くにあたり、現実をできるだけ忠実に描くことに全力を傾ける。そのためにはできる限りのリサーチを行う。そうすることによって、作品を読む読者に「真の共感と深い親近感」を覚えさせることができる。作品の登場人物やその行動、物語の展開に、読者が共感する瞬間があるならば、その作品は成功したといえよう。ナム・リーの作品に評価を与えるとするならば、その作品を読む読者に大きく依存することになるであろう。

ナム・リーの短編集『ポート』は、日々刻々と変容する現代を象徴するように、小説界に新しい風を吹かせた。ポート・ピープル、エスニック作家という宿命を背負ったナム・リーは、その宿命に囚われることなく、逆にエスニック作家の枠を超えたといえるのではないだろうか。彼はベトナム系作家としてデ

ビューするが、その作品は批評家や読者の意表をつく形で、彼らの心をつかんだ。彼が作品のなかで展開する世界は、今までの小説の概念を大きく変えるものだったからである。彼がこの小説で試みているのは、作家がエスニシティを消滅させ、自由自在に世界中のどこにでも、どの時代にも、想像力をもって飛びまわることができるということであろう。それは、現代の小説の伝統の流れに一石を投じるものであると考える。

ナム・リーは、ベトナム系、というハイフン付きではなく、作家ナム・リーとして作品を書くことになるであろう。しかし、彼のデビュー作に幸運をもたらしてくれたのは、皮肉なことに、ベトナム系オーストラリア人作家という肩書だったのかもしれない。ナム・リーが作品のなかで発揮している独創的な発想も、彼のエスニシティが大きく影響しているのかも知れない。これも、ナム・リーの宿命だといえるのではないだろうか。

なお、上記の(2)についての研究成果は次の論集に収録されている。

有満保江「無国籍作家ナム・リーの挑戦：短編小説集『ボート』をめぐって」*JANTA Bulletin* (招聘執筆、査読無) No. 8, October 25, 2010, 15-31.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① Yasue Arimitsu “The Contemporary State of Academic Appraisal of Australian Literature in Japanese Universities” *Antipodes*, 2011 (査読有、掲載確定)
- ② 有満保江 「無国籍作家ナム・リーの挑戦：短編小説集『ボート』をめぐって」*JANTA Bulletin* (招聘執筆、査読無) No. 8, October 25, 2010, 15-31.

[学会発表] (計5件)

- ① Yasue Arimitsu “The Transformation of Literature in a Globalizing Society” in a Globalizing Society,” CAPSTRANS Seminar, Wollongong University, Wollongong, Australia, March 19, 2010.
- ② Yasue Arimitsu 「多文化社会における文学の変容」日豪NZ教育文化学会、第9回全国大会、駒澤大学深沢キャンパス(招聘講演) (January 11, 2009)
- ③ Yasue Arimitsu “Nation and

Literature: Literary Possibilities in a Multicultural Society,” International Symposium on Racism, Slavery, and Literature (Innsbruck University, Austria) Austria, Dec. 3, 2008.

- ④ 有満保江 「現代先住民画家『エミリー・ウングワレー展』」第29回日豪合同セミナー「オーストラリア大使館・豪日交流基金主催、於：東京、八王子大学セミナーハウス (May 31, 2008)
- ⑤ 有満保江 「多文化社会オーストラリアの文学と表現—『ダイヤモンド・ドッグ：多文化を映すオーストラリア短編小説集』」東京、代官山のヒルサイド・フォーラム、(May 30, 2008)

[図書] (計3件)

- ① Yasue Arimitsu “Nation and Literature : Literary Possibilities in a Multicultural Society,” *Racism, Slavery, and Literature*, Wolfgang Zach and Ulrich Pallua (eds.) Frankfurt am Main: Peter Lang, Frankfurt am Main: Peter Lang, 2010, 266(33-46).
- ② 有満保江 「グローバル化社会における文学の変容—多文化社会オーストラリアと小説の役割」『イギリス小説の愉しみ』音羽書房鶴見書店、2009年、451頁(420-442).
- ③ ケイト・ダリアン・スミス・有満保江 『ダイヤモンド・ドッグ—多文化を映す—現代オーストラリア短編小説集』現代企画室、2008年、238頁。(経編・共訳)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有満保江 (ARIMITSU YASUE)
同志社大学・言語文化教育研究センター・教授
研究者番号：20097075

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし